

〔研究ノート〕

資本主義はどこへ向かうのか —現代の批判的知性による多面的精察—

塚 本 恭 章

I. 危機と変革—なぜいま「資本主義」を問うのか

リーマン・ショックを震源とする「百年に一度」の世界金融危機から10年目となる2018年。さらに本年は、明治維新（1868年）から150年目でもある。「資本主義の変革とオルタナティブ」がより探究される年となろう。大きな問題としての「資本主義はどこへ向かうのか」が深層から問われている時代なのだ。日本をふくむ現代の先進資本主義諸国の世界情勢は、不透明さと不安定さを一段と増してきている。年末年始の読売、日経新聞など各誌朝刊はそのことを、2017年の総括と2018年の展望として一般読者に伝えていた。トランプ大統領の誕生とその後のアメリカの世界経済における立ち位置、国民投票でのイギリスのEU離脱など、そうした「反グローバル化」ないしは「脱グローバル化」としての動向がこれからの世界経済にいかなる実践的帰結をもたらしうるか、今後も注視し続ける必要がある¹。そして日本社会には「実感なき景気拡大」と

1 日本においても著名な国際政治経済学/グローバルリスク分析の専門家イアン・ブレマー氏の新著『対立の世紀—グローバルイズムの破綻』（2018年6月邦訳刊行）の原題は「US VS. THEM（われわれ対彼ら）」であり、その内容は世界中に生じてきている「分断/対立」問題の深層を明快に読み解くものとしてきわめて示唆に富んでいる。ブレマーはいう、「ドナルド・トランプが『われわれ対彼ら』の構図を作ったのではなく、この構図がドナルド・

いう感覚が依然として根強く漂っている（「読売新聞」朝刊，2017年12月28日「回顧（下）」）。多くの労働者の賃金上昇の実現も期待されてよい²。専門家筋のあいだでは、いわゆる「ゴルディロックス（適温）経済」が2018年も継続するとの見方が強いようだが、政治や社会、経済にある種の〈閉塞感〉をわれわれは抱いていないだろうか。そんなとき、いったい「なに」を「どう」すればよいのであろうか。ニヒリズムに陥ることは避けねばならない。

4年前に刊行された水野和夫氏のベストセラー『資本主義の終焉と歴史の危機』（集英社新書，2014年）は、社会科学としての経済学がその生誕以来、学問的にもっとも重要なテーマのひとつとしてきた「資本主義」を正面に据え、その「終焉」論を「歴史の危機」という雄大な歴史的コンテクストのなかで論じ直した先駆的作品だ（続編は『閉じてゆく帝国と逆説の21世紀経済』集英社新書，2017年）。先進諸国での超低金利の持続的状態を「二十一世紀の利子率革命」と称する水野は、「利子率の低下とは、資本主義の卒業証書のようなもの」であることをつとに強調する。概してゼロないしはマイナス金利、ゼロ成長そしてゼロインフレを現在の主要特徴とする「資本主義」は、そもそも「資本主義」と呼称してよいのかという疑問符はきわめて核心的であろう。「資本主義のゆくえ」を洞察することは「資本主義の現状」への正確な理解を必然的に要請する。当該新書の第5章「資本主義はいかにして終わるのか」には、次のようなす峻に富む見解が表明されている。すなわち、「誕生時から過剰利潤をもとめた資本主義は、欠陥のある仕組みだったとそろそろ認めるほうがいいので

トランプを生み出したのだ」と。世界中のいわゆる地政学的危機を各国の最新情勢をふまえて論じる手捌きは見事であり、本書はこれからの世界が留意すべき多くの重要な政策的・思想的メッセージを発している。

2 「読売新聞」朝刊（2018年5月12日・1面）には、東証一部に上場する企業の2018年3月期決算が30兆円規模となり、2年連続最高益であると報じている（同じく「読売新聞」2018年6月30日・9面において、2017年度の国の税収が58.8兆円となり、1991年度のバブル期以来26年ぶりの高水準であると報じている）。ただ翌日の同紙朝刊の「社説」では「好業績と景気実感の溝を埋めよ」との文章が掲載されており、賃上げ率の低さや労働分配率の低迷が指摘されている。

はないでしょうか。ダンテやシェイクスピア、あるいはアダム・スミス、マルクス、ケインズといった偉大な思想家たちがその欠陥を是正しようと命がけでたたかってきたから、資本主義は八世紀にわたって支持され、先進国に限れば豊かな社会を築いてきたのです。資本主義というしくみが多くの欠陥や矛盾、そしてまた逆説や謎を内包していることは経済学者に限らず、誰もが知っている。しかしそのことの理論的・思想的意義や今日的な含みをあらためて根本から問い直すことが喫緊のテーマとしてより強く要請されているのではないだろうか。ここ数年、学問的関心を高めてきている「資本主義の限界/終焉」論もそれに通じるところであろう³。

本稿はこうした問題意識をふまえ、現代の「資本主義」が直面する多様かつ錯綜した問題群について、経済学の偉人たちの洞察を活かしながらあらためて果敢に挑んだ新刊書『欲望の資本主義 2 一闇の力が目覚める時』（東洋経済新報社、2018年5月）を概観・論評することを主要課題としている。本来の学術誌のカテゴリーとしては「書評」になるであろうが、書評としては分量的にやや長く、また当該本書をもとにわたくしなりの思索と考察を論じている箇所もあるゆえ、今回は「研究ノート」として公刊することとした。古典は「古典」としての制約を抱えながら当該時代を越境し、今なお「現代」的な輝きと生命力を放ち続けている。そのことを実感できる一作品とあってよいであろう。

3 水野氏以外には、たとえば伊藤誠『資本主義の限界とオルタナティブ』（岩波書店、2017年）やデヴィッド・ハーヴェイ『資本主義の終焉—資本の17の矛盾とグローバル経済の未来』（作品社、2017年）などの代表的作品がある。また次の2つもあわせて参照していただきたい。1つは、そうした諸作品をふくむところの当該テーマをめぐる最新の拙稿「資本主義をめぐる思想と理論を問い直す—新自由主義とグローバル化に対抗するオルタナティブへ」（『現代思想』青土社、2018年4月号、162-173頁）である。もう1つは、伊藤誠氏の最新書『入門 資本主義経済』（平凡社新書、2018年2月）の刊行を契機とし、「資本主義はのりこえられるか」というテーマをめぐる氏の「対談」である。伊藤氏とわたくしとの対談は2018年3月29日におこなわれ、その対談内容は「週刊読書人」（2018年4月20日号1・2面、第3236号）に掲載されている。氏の当該新書とあわせ、当該対談もぜひお読みいただきたい。

II. これからの「資本主義」を洞察する—「闇の力」との対峙

前作『欲望の資本主義—ルールが変わる時』（東洋経済新報社、2017年）⁴の続編の本書は、新たな副題「闇の力が目覚める時」を付し、われわれが生き暮らす「資本主義」という巨大な社会機構に潜む光と影を鋭く照射しようとする気概がより前面に押し出されている。

2018年1月3日NHK・BS1にて初回放送されたドキュメンタリー番組の内容を編纂し単行本化した本書は、対談形式で読みやすく、「資本主義」をめぐるの思索を深めるための数多くの洞察と提言が盛り込まれており、なかなかスリリングである。事実上の当該著書の編者である丸山俊一氏による冒頭・巻末での読者の知的好奇心を喚起する文章も有意義だろう（評者的には、続編第2弾でもナビゲーターを担当された安田洋祐氏の一文も欲しかったところである）⁵。それゆえ前作との併読だけでなく、当初のドキュメンタリー番組自体も視聴し、映像視覚を通じた当該問題の重要さと面白さを掴んでほしいところで

4 前作に対し、拙稿「資本主義と人間をめぐる経済思想史—最近の著書5冊の紹介と批評から—」（愛知大学『経済論集』第204・205合併号、23-58頁）で書評を執筆している。本書の内容に通底する作品として、フロイトの〈死の欲動（タナトス）〉という概念から、グローバル資本主義の現代的特質とゆくえを展望したG・ドスタレールとB・マリスによる共著『資本主義と死の欲動—フロイトとケインズ』（藤原書店、2017年）が大変興味深く含蓄に富んでいる。フロイトの当該概念は、ケインズの流動性選好としての「貨幣欲望（貨幣愛）」の根源的性質を見抜くうえでも重要なキーとなる。本書「はじめに」には次のような印象的な一文が記載されている。「市場という資本主義のこの活性剤は、建前だけの平等の恐るべき場であり、模倣欲望の場、怨恨の場、ならびに蓄積において稼働する死の欲動の途方もない触媒である」。なお当該共著の訳者である齊藤日出治氏の『グローバル資本主義の破局にどう立ち向かうか—市場から連帯へ』（河合ブックレット40、2018年）もすぐれた概観的総括をおこないながら、社会的連帯経済というオルタナティブを探究している。

5 とくに丸山氏の巻末文章は興味深い内容には違いないが、いささか冗長で、本書の対談内容や番組の趣旨自体のためにこれだけの分量の「おわりに」をおこなう必要性に疑問符がつく、というのが評者の率直な感想である。「解説」があるぶん、実際の番組を視聴していない読者には一定の利便性があることは確かだが、解説はむしろ控えめにし、それは読者自身に思索させる趣をこそ本来もつのではないか。放送番組から実際の書籍化にあたっての編纂作業と内容の取舍選択の難しさであろう。

はないだろうか（本書では割愛されている識者の見解も貴重で参照に値し、たとえばスティグリッツやスキデルスキーらへのインタビュー収録は本書の充実度を確実に高めたはずだ。本書構成はコンパクトになった反面、元来の映像内容のもつ多様性が減じたことは否めないだろう）⁶。そこでは、マルクスやシュンペーター、ケインズら偉人らの言説と思想が巧みに活用されており、現代社会を生きるわれわれに新鮮で深い感慨をもたらしてくれる。「資本主義」と格闘した彼らの遺したメッセージは始発点にほかならず、そのベクトルをどう拡充・深化させうるか、本書に登場する世界の批判的知性のもつ共通認識といつてよい。

前作に続いてナビゲーターを務めた阪大准教授の安田洋祐氏と今次対談をおこなったのは、フランスの知性を代表する経済学者ダニエル・コーエンで、彼の近著『経済成長という呪い—欲望と進歩の経済史』（東洋経済新報社、2017年）が邦訳刊行されている⁷。コーエンはまた、トマ・ピケティとパリ経済学校を設立した人物でもある。現代経済社会のしくみや人々のライフスタイル・価値観などを大きく変えつつあるイノベーションにもとづく新たなテクノロジーと経済成長との関連を主要テーマとしながら、両氏の対談は「これからの資本主義」のゆくえを多角的な観点から問い直し、それは経済学的な領域をこえるものである。そのような対談から、われわれはどのような理論的ないしは思想的な含みとメッセージを汲み取ることができるのであろうか。

当該対談で主張されている一連のコーエンの見解は、必ずしも高い独自性に

6 当該番組に出演していたドイツの経済ジャーナリストのウルリケ・ヘルマン氏の著書『資本の世界史—資本主義はなぜ危機に陥ってばかりいるのか』（太田出版、2015年）は、「資本主義を考えるための必読書」との評価が高い良書だ。2018年5月末現在ですでに第5刷発行と版を重ねていることからその点がうかがえよう。

7 コーエンが「日本語版序文」で書いている文章はまさに本書対談の内容と合致する。すなわち、テクノロジーの急速な発展と経済成長率の低迷という逆説的な事象をめぐって氏は、「それまでの産業革命は人間の労働を内包できたのに対し、現在の革命はそうではないからだ」と述べながら、ただし、「近い将来、人間とテクノロジーの新たな補完関係が登場するだろう」とも表明する。当該本書では壮大な文明論史的な論議が展開されており、対談内容のよりよい理解に寄与するであろう。

富んでいるだけでなく、かつて自身が悲観主義的であり過ぎたことを省察し、21世紀型の社会民主主義的なスタンスを保持しながら、現代の世界経済情況とその趨勢を慎重かつ冷静に捉えている。2008年世界金融危機が経済学者に突き付けた「謙虚の教訓」（58頁；以下とくに断りのない限り本書の頁数）という矜持を心に刻んでいるのだろう。その姿勢の意義は強調するに値する。現代経済の様相が多面的で非線形的であればあるほど、一義的な結論を導き出すことは困難であり、かえって危険ですらあるといえよう。複雑な経済現象が必然的に持ち合わせる多面性（簡潔に二面性といってもよい）を構築する要因とその因果関係を正確に把握することがまずもって重要ではないか。氏の分析はその意味でも謙虚だ。現代のわれわれは「移行期」に生き暮らしており（コーエンは「ポスト工業化社会」より「デジタル社会」がより適切な名称であるという）、これから10年後20年後の世界経済の全体像を的確にイメージし描き出すことはできない。それは、数日先の天気を気象学から予測できても、1カ月後の天気を予測できないことと同じである。

コーエンによれば、「資本主義」は市場経済と科学技術革命という2つの力の「孫」にほかならず、それはいわばスミスとシュンペーターの経済像の結合ともいえる。デジタル革命が牽引する急速なテクノロジーの進歩（ICTやAI）とそれが浸透してきているにもかかわらず、生産性が上昇せず景気低迷から抜け出せていない、いわば「新しいテクノロジーの発展と経済が分断されている」（24頁）かのようなパラドキシカルな現実が一方にある。コーエンが重要視するルーティンワークと非ルーティンワークという概念区分が端的に示唆しているように、新たなテクノロジーに代替されえないのは後者のみなのであり、そのことの含みはなかなか重く深い。氏のいうところの「創造的であれ、さもなくば死だ（Be Creative, or die）」といった、芸術家的なライフスタイルをあらゆる労働者に強いる社会の到来を意味し、そのような社会における労働環境は概して人々に多大な精神的緊張とストレスをもたらし続けることとなる。格差（富の偏在）・疎外の拡大も進展し、社会生活の不安定性を増すことにもなる。

シュンペーター的な「創造力の追求が新たな義務になった」（43頁）資本主義とは、岩井克人氏のいうポスト産業資本主義であり、それは従来の大量生産・大量消費による労働生産性の向上と農村における過剰労働力の存在による産業資本主義的な利潤創出メカニズムの前提条件に限界が生じたことの論理的帰結にはかならない（岩井 [2000]）⁸。政府の所得再分配や積極的な教育投資、そして住宅・都市・環境政策の拡充やベーシックインカムのような格差是正のための社会保障制度の導入が有力案であるのは、「労働者にとって本当に必要なのは、生涯、取り残されないという保障があること」（40頁）だからである。コーエンによるこうした主張にまったく異論はない。カリフォルニア州で現在進められている地球温暖化対策の新たなテクノロジーにコーエン自身もまた期待を寄せているようだ。

とはいえ、「新たな産業革命が収穫逓減点に到達するにはまだまだ時間がかかる」（77頁）と主張するコーエンにとって、総じて「資本主義の未来は明るい」（75頁）ものとなる。シュンペーターのかつての見通しは間違っていた。ただ続けて氏はかりにそうであったとしても、「私は資本主義に肯定的な見方はしていません。どちらかといえば資本主義に批判的です」（83頁）と述べ、さらにまた、「今の私たちの社会で起きていることはそれほど好ましいと思いません」（同頁）という率直な見解をも提起している。それは、氏にとっての重要な問題関心のひとつである、現代のポスト物質主義社会が直面するグローバル地球環境問題と関連するところだが、いずれにせよ、こうした一連の見解から汲み取れるコーエンのスタンスのある種の〈アンビバレント性〉をどう理解すればよいか。どうやら昨今の「資本主義の限界/終焉」論とはあきらかに異なり、新たなテクノロジーが及ぼす錯綜した問題群—富裕層と中産階級・下

8 この点について岩井氏は、『経済学の宇宙』（日本経済新聞出版社、2015年）の第6章においても次のように総括されている。すなわち、「人工知能がまだ人間の能力に追いついていない現在、『ヒト』しか、もっと正確に言えば、ヒトの創造力しか『差異』を意図的に創りだすことができないからです。利潤の源泉が、機械制工場から、ヒトの能力や知識に大きく移行しつつあるのです」。

層階級への二極的分化、雇用奪取の潜在性やそれに伴う将来不安の助長などを認識しながらも、それがもたらしうる明るい未来の可能性に期待することもけっして否定しない、いわば「中庸の楽観主義」の表明とでもいうか。悲観主義やニヒリズムでもなく、かといって過度の楽観主義でもないのだ。万能なる打ち出の小槌や魔法の杖など存在せず、「希望の実現」には忍耐強さとそれにもとづく柔軟な想像力（創造力）が欠かせない。そう言い切るコーエンはすこぶる人間的であり、そういうテーゼこそ“Be Creative, and live”なのかもしれない。ケインズによるかつての有名なエッセイ「われわれの孫たちの経済的可能性」（1930年）での将来の経済予測と違い⁹、われわれはポスト経済どころか、さらに「かつてないほどに経済のルールに支配された世界に生きている」（45頁）。「創造性」（ないしは差異性）という名の生命が短期化しつつある時代だが、それは複合的な「闇の力」に対峙するための重要な原動力なのだ。氏のコアメッセージは冷静だが温かい。

＊

前作に続けての登場となったチェコの経済学者トーマス・セドラチェック¹⁰は、ドイツの若き俊英の哲学者として世界的に注目されているマルクス・ガブリエルと対談し、それが本書の後半内容をなす。「資本主義はショウ（見世物）だ」という共通論題を基層に置く両者の対談内容はきわめて多岐に及んでおり、思想的含みも広く深い。ただ当該テーマが示唆するように、資本主義とは何か、そしてそのゆくえを現代的に探究する学問精神にこそもっとも着眼すべきことは間違いない。

9 東大名誉教授の吉川洋氏による「地球を読む」（「読売新聞」2018年4月23日、朝刊1・2面）の『『豊かな』21世紀』という文章でも、ケインズの当該エッセイに論及し、そしてシュンペーターが強調したイノベーション（革新/新結合）の現代日本経済における可能性について氏の持論を展開しており、参照に値する。

10 セドラチェックが2015年に共著で刊行したドイツ語の「続編」が邦訳された。『続・善と悪の経済学—資本主義の精神分析』（東洋経済新報社、2018年6月）。前作は単著で刊行された『善と悪の経済学』（原著刊行は2012年、邦訳刊行は2015年）。なお本書についてはあらためて別媒体にて書評を執筆する予定である。

社会科学としての経済学が資本主義経済の体系的発達の自己認識の歩みとして開始されたことは周知のところであり、経済学（史）は資本主義という考察対象と密接不可分の関係にある。そのため「資本主義」にはこれまでその定義が絶えずなされてきた。たとえば、生産手段の私的所有制を基本とし、市場での自由競争を原則とする経済システム、資本（利潤）拡大を原動力とする社会経済システム、資本一賃労働関係（資本主義的階級関係）を基礎としながら、労働力が商品化されそれが全組織化する社会など、だ。ごく簡明に「徹底した市場経済社会」（伊藤誠 [2018]）という定義もあろう（近年では、「資本主義」に付す接頭語として「情報」や「知識」、ないしは「金融（化）」などを用いるケースも散見されるところだが、それは資本主義の現代の特徴を端的に示すものであり、従来の定義が意味を失うわけではない）。

さて本書においてガブリエルは、資本主義を「モノの生産を伴う組織的な活動全体」と定義し、その内実をさらにこう説明している。すなわち、Produceという「モノを生産する」という言葉の語源は、「前面に導く」であり、『モノを生産する』とは『前に導く』＝『見せる』ということです（115頁）。そして生産はある意味で「ショウ（見世物）である」という新たな見識を披露する。すなわち彼によれば、「今では資本主義は、ショウとしてあらゆる測定方法がある経済システム」（116頁）なのだから、「資本主義には代替案がありません」（同頁）。本書後半で論及されるように、アートも「消費」されるのであり、大気汚染など環境汚染がきれいな空気を「商品化」している（マイケル・サンデルによる『それをお金で買いますかー市場主義の限界』早川書房、2012年にそうした事例が豊富に紹介されている）。現代はこうしてあらゆる商品が「ショウ」として自由市場で売買される経済環境であり、それはいわゆるグローバリゼーション（グローバル資本主義）の推進によってさらに加速しているといえよう。他方セドラチェックは、資本主義的実験を共産主義（社会主義）は許容しない（逆に社会主義・共産主義的実験を資本主義は許容する）と述べ、それゆえに「資本主義はそれ自身の代替案」（120頁）であり、シュンペーター的に「資本主義

システムは自身に対する批判によって生きています。資本主義は批判を称える唯一のシステム」(同頁)であることをつとに強調している。

彼のいう資本主義システムが「批判を称える」とは、「批判それ自体を自由におこなえる」し、また「そうした行為それ自体を許容しうる柔軟性」をもっているということにほかならない。社会主義圏という環境下で育ったセドラチェックにとって、資本主義はまずもって「自由のためのツール」なのだ。そのような許容度・柔軟性が備わっていることにより、市場経済にもとづく資本主義は試行錯誤を通じた創造的な変化を模索し、拡張し続けることをその使命とすることができる。たしかにこうした資本主義システムが内在的にもつ「懐の深さ」はきわめて重要な特性であり、社会主義システムとの重大な相違をなしていた。セドラチェックは続けて、「資本主義がよいシステムだと言っているわけではありません」(同頁)と留保しているが、「資本主義に代替案がない」というテーマについての見解はいささか早計で短絡的ではないか。21世紀型社会主義をふくめ資本主義のオルタナティブを探究することの世界史的意義は今日的にみても増しており、むしろ「代替案がない」ことで歴史の未来への選択肢を狭め、先進資本主義諸国が直面している深刻な限界への原理的理解も及びにくくなるだろう。彼らは資本主義システムが自己矛盾や逆説・限界を数多く抱えながらも、持続可能性をもった唯一普遍の社会経済システムであるとみなしているのであろうか。

ただガブリエルは「システムは、すべてを包み込んだ途端に、内部から崩壊するのです」(144頁)と述べ、19世紀のドイツ哲学者シェリングの『人間的自由の本質』(1809年)のコアメッセージを紐解く。システムを維持しうるためには「外部」が欠かせないのであり、「外部との境界がないシステムは、それを維持するには、内部に異質なものを作り出さなければなりません」(同頁)。シェリングによれば、それこそ「悪のダイナミクス(力学)」である。さらに「資本主義が成功という概念の上に成り立っているシステムだとすると、成功した時点では観測できなかった物事を、さらにコントロールしたくなります」(165

頁)とガブリエルは続けるが、それは「ショウがショウを呼び起こす」無限の欲望が自己増殖していく資本主義本来の姿態であろう。

こうした彼の一連の主張は興味深く、資本主義の「懐の深さ」と「したたかさ」をあらためて実感できるところであろう。「成功」のためには、そして「存続」のためには異質なものとしての「内なる他者」(テロリズム、難民問題、北朝鮮問題など)を必要不可欠とする資本主義経済システム。現代はそれが「グローバル資本主義」と化している。資本主義は「変化し続ける」ことはできるであろうが、「拡大し続ける」ことは果たしてできるのであろうか。内部と外部の緊張関係—外部の存在によってこそ内部秩序は維持される—が動揺・瓦解し、資本主義システムが限界から終焉を迎えることも否定しえないのではないか。「私たちは経済成長を促すために、異質なものを探し続けています。経済成長の第二段階には、大きな崩壊が必要なのです」(172頁)というガブリエルの認識は、評者的にはある種の凄みを伴ったものとして印象深い。資本主義もそれを考察対象としてきた経済学も「危機の産物」という側面をもち、それが新たな原動力となってきたことは間違いない。そしてそれはおそらくこれからも変わらないであろう。資本主義そして資本主義システムの変容が継続していくときに、セドラチェックもガブリエルも哲学や倫理の重要性に対談最後で言及している。合理的経済人としてのホモエコノミクスを経済主体の中核にすえて理論構築をおこなってきた経済学は、いわば哲学や倫理(性)というものと必ずしも明確に対峙してこなかったといえるかもしれない。それゆえ、あらためて経済哲学や経済倫理といった学問分野が要請されているのだろう。

これからの世界のためには強力なグランドセオリーの構築が必要であると説くガブリエルのメッセージを、経済学者をふくむ社会科学者はどう受け止めるべきであらうか¹¹。「学問領域間の協力を強めることが必要です」(188頁)とい

11 セドラチェックもガブリエルもマルクスには一定の敬意を示しながら、「マルクスではない左派の理論が必要だ」(175-6頁)と主張し、マルクス理論から学び直す姿勢はきわめて乏しいように感じる。とくにガブリエルは、「マルクスは役に立ちません」し、「……理論的を外れです」(175頁)と断定しているが、シュンペーターがマルクスの経済理論のほと

う点にまったく異論はないが、学問が高度に細分化・専門化している現状のなかでそうした作業の遂行自体は必ずしも容易ではないだろう。ただ、経済学の多様な競合的学派は各学派固有の問題関心をこえ、「資本主義」を共通論題としながら考察と省察を及ぼし続けてきた歴史的な学問的蓄積がある。スミス、マルクス、シュンペーターそしてケインズにせよ、そうした偉人らの洞察はグランドセオリーに向けての大きな遺産にほかならない。セドラチェックとガブリエル両氏の対談内容の多くは現代的な問題関心から導かれてはいるが（トランプ大統領やAIをめぐる彼らの意見交換も新鮮だ。いまやトランプ大統領やAIについての記事や報道をみない日はないといっても過言ではないのであり、現在が政治・経済分野での大きな転換期にあることがうかがえるだろう）、彼ら自身の思索の背景にはこうした巨大な遺産の批判的継承という営みを基盤としている。奇才の経済学者と異才の哲学者による当該対談は「資本主義」というテーマを通じてこそ噛み合ったのであり、「資本主義への反発は、現実の中から生まれて」（188頁）いる以上、「現実」それ自体を成り立たせている複数のメカニズムや構造的動因、思想・観念、そして「闇の力」を正確に把握することからわれわれは出発せねばならない。丸山氏が指摘するように、両氏の対談は、縦横無尽で刺激的すぎるがゆえに読者を置き去りにする可能性もなくはないが、斬新な切り口で豊かなイメージネーションを喚起させうる奥深い内容をなしている。壮大な「物語」は続く、いや続かねばならない。

んどすべてを否定したにもかかわらず、資本主義の動態的進化という経済ビジョンは高く評価し、それをみずからの「経済動学の理論」に組み入れたように、マルクスの活かし方は多様であり、彼への評価はより慎重であるべきであろう。こうした内容は巻末の丸山俊一氏の文章が強調している、シュンペーターがマルクスに見出した「闇の力」＝「可能性の中心」というスタンスとも齟齬があるようにも思われる。むろん編者の見解は编者独自のものであってよい。

Ⅲ. 若干の考察—新たな経済思想にむけて

(1) ケインズの貨幣像と市場像

実際の OA ドキュメンタリー番組では、しばしば登場するマルクスやシュンペーター以外にケインズにも着眼し、とくに彼が重視した流動性選好としての「貨幣」愛への言及があった。ケインズは「月」を人々が欲することが失業の原因であり、ケインズにとってそれは遠くにあつて手に届かない限りない貨幣に対する「人間の欲望」を象徴するものにほかならない。本書ではその点への考察がほとんどなく、ケインズ自身への論及が少ないのはいささか残念である。スティグリッツ、セドラチェックそしてスタンフォードの各氏への前著での最後の問いは、「お金とはなにか」という経済学的かつ哲学的なものだった。三者三様の回答が提示されたが、今作もそれを引き継ぐことができただろう。シュンペーターの「創造的破壊」としてのイノベーションは、人間の潜在的な欲望自体を顕在化する社会変革メカニズムであり、セドラチェックによれば「欲望は増殖を生む」。ポスト産業資本主義の時代は、「差異」それ自体を人間の主体的な自由意志によって絶えず創り出していくことでしか、資本主義企業は生き残れない。人財(ヒトが財産である)の意義がより高まっている。貨幣やイノベーションをふくめ、「欲望」という概して掴みどころのない人間の根源的な内面心理こそ経済社会のより深部に根をはりめぐらしている(社会主義の究極の目標は貨幣と市場の廃棄であった)。欲望をコントロールすることはそもそも可能か、前作・今作の両著のストーリーを貫き流れる重要なテーマのひとつだ。

二人とも故人だが、上記脚注ですでに言及しておいたドスタレーとマリスの共著『資本主義と死の欲動』(藤原書店、2017年;原著2009年)第2章は「ケインズと貨幣欲望」についてのきわめて深い思索がなされており、ケインズ自身はフロイトの〈死の欲動〉概念の先駆性を早くから見抜き、それを「貨幣」と関連付けていた。すなわち「ケインズにおいて、死の欲動は、貨幣愛というかたちをとる」のであり、さらに「貨幣欲望の破壊的性格は、……、それは人

間の生存と同様に、自然の生存までも脅かす¹²。ゆえにそうした「貨幣」によって成立させられるケインズにとっての「市場」とはなにか。それは「盲目で、盲従する、無知で、愚かな群衆であり、パニックにつきしたが、パニック自身が引き起すあらゆる運動、つまりあらゆるうわさの狂気に敏感に反応する群衆である」。社会科学としての経済学の生誕以降、「貨幣」と「市場」は経済学においてもっとも基本的かつ重要な概念であり、ケインズのそれら2つの理解は、主流派の新古典派経済学のものとは明確に異なっている。今後、続編としての『欲望の資本主義3』がかりに制作されうるならば、マルクス、シュンペーターそしてケインズの三者をより明示的で立体的に射程におさめた書籍構成を評者的には期待したい（単行本化に際して様々な諸事情があろうことはむろん承知している）。

(2) オルタナティブとしての経済思想

本稿冒頭で触れておいたように、本年2018年はリーマン・ショックから10年目の年であり、より専門的なことをいえば、昨年2017年のマルクス『資本論』150年、ロシア革命100年に続いて、今年マルクス生誕200年の年として世界的に注目されてきている。リーマン・ショックによって（常に「もう死んだ」と言われ続けてきた）マルクスとケインズが復活¹³、彼らのような経済学の

12 当該共著の訳者・齊藤日出治氏による巻末の〈訳者解説〉である「フロイトとケインズで読む資本主義の破局的危機」はきわめて的確かつ深い考察がなされた内容であり、ぜひ一読されることを強く推奨したい。そこにはケインズについてこう記載されている。すなわち、「ケインズは貨幣欲望が『死の欲動』であることを熟知しながら、この『死の欲動』を駆動力とした経済成長の推進によって『死の欲動』を制御し、その成長の成果を享受＝エロスにつなげようと考えたのだった」。

13 次のような一連の諸著作の刊行が二人の理論家の「復活」を端的に告げているといえよう。伊藤誠『サブプライムから世界恐慌へ—新自由主義の終焉とこれからの世界』（青土社、2009年）、基礎経済科学研究所編『時代はまるで資本論—貧困と発達を問う全10講』（昭和堂、2008年）、ロバート・スキデルスキー『なにがケインズを復活させたのか—ポスト市場原理主義時代の経済学』（山岡洋一訳、日本経済新聞出版社、2010年）。マルクスやケインズの「復活」に限らず、その復活は新たな洞察を伴った現代的再生という意味における「復活」にほかならない。岩井克人 [2015] の経済学史講義プロットでは、科学としての経済学の誕

偉人の「思想」は絶えず経済危機を契機に蘇るものであることを強く感じさせる。いや、蘇るというより、もともと彼らの「思想」自体は死滅していないのであり、日々の社会・経済現象の背後で脈々と生き続けている。資本家階級と労働者階級の二極分化に伴う重層的軋轢や働く労働者の長時間労働をめぐるさまざまな災厄、格差・不平等、貧困問題の深刻化や人間疎外のより一層の拡がりなどは、マルクスが『資本論』執筆時に直面していた事態にほかならないが、これらはそのまま21世紀の現代社会にも妥当していないだろうか。そしてまた、世界的な総需要不足による景気低迷の持続化という現状とそれを打破しうる新たな一連のイノベーションの潜在性を展望する現代的動向は、ケインズとシュンペーターの経済観が有機的に融合したものであろう。経済思想は変転・循環している。

リーマン・ショックからわれわれは「恐慌」という経済用語を目の当たりにしたが、アメリカを震源地とするこの世界金融危機後の世界はどうなっていくのか。そしてより広く、資本主義世界はどのようなゆくえを辿っていくのか、相当数の経済学者をはじめとする社会科学者は強い学問的関心を抱いたに違いない。1929年の大恐慌後の世界秩序には、経済の自由放任主義に代わって、ケインズ的な「修正資本主義」にもとづく経済思想・政策案があり、ロシア革命で誕生したソ連型「社会主義」というもう1つの代替路線もあった。そのいずれも70年代以降に行き詰まり、1980年代以降、反ケインズと反社会主義の急先鋒としてフリードマンやハイエクらの「新自由主義」（従来の自由放任主義の新たな装いであり、宇沢弘文のいうところの市場原理主義）が支配的政策基調としてアメリカやイギリス、日本でも導入されていき、グローバル化とも相まっていわゆる新自由主義的グローバル資本主義が40年近く存続している。こと

生といわれるスミス古典派経済学に先立って、古代のアリストテレスや重商主義学説について多くの時間を割いている。そこにあるのは、「資本主義」と「貨幣」についての根源的な思索への再評価であり、経済学の問題と理論の歴史における「再発見」という営みはとりわけ重要な意義を有している。新たな経済思想やヴィジョンの再構築もこれが出発点となる。

に日本ではその明確な限界が叫ばれながら（伊藤 [2017]；伊藤 [2018] 第 4・5 章），それに代替する明確なオルタナティブがなかなか見えてこないというのが現状といつてよい。それを打開するためには，むしろ正確な現状認識・分析がまず必要であることは周知のところである。長い時間的スパンで歴史を回顧すると，修正資本主義（ケインズ），社会主義（マルクス），新自由主義（フリードマン）という 3 つの選択肢のいずれもが大きな欠点と限界を内在し，それぞれの経済思想・理論のメリットを単純に結合し合うだけでは，現代の資本主義が直面する多種多様で複雑な問題群に有効に対処することは難しい¹⁴。資本主義に代替するオルタナティブを学問的に正確に展望・確立することが容易でない主要理由もここにある。既存の経済思想の再吟味にとどまらない，新たな経済思想とヴィジョンの創造が真に求められているからだ。そしてオルタナティブは多元的であつてよい。本書の世界的知性三人の対談は，問題のコアとそのための思索の意義を読者に鮮やかに伝えてくれている。解答でなく，読者自身も共に考えるべき洞察なりヒントを数多く提起してくれてもいる。「未知の問題」に挑む営為は「未知への自由」から醸成される。本書はそのためのすぐれた教材となろう。

マルクスやシュンペーターなど偉人といわれる経済学者の言説や思想は一見すると難しい印象を与え，経済学を専門としていない（専門としている経済学者であっても，というべきか）一般読者には迂遠な存在のように受け止められがちだが，一般と専門という壁を取り除き，現代の資本主義をめぐる多面的問題群の時代文脈と意義について，世代間をこえた広い層に伝えようと祈願した

14 このような問題意識を明確に共有しながら，主流派の新古典派経済学における貨幣と市場をめぐる理論的反省から，「資本主義はどこへ向かうのか」を重厚に論じ直した注目作として西部 [2011] がある。またヴェブレンをはじめとする制度主義経済学や J・デューイらのリベラリズムの真髄を汲み取りながら，いわゆる「社会的共通資本」論の現代的意義と役割について，主流派経済学批判をふまえながらきわめて精力的に展開された世界的経済学者の（故）宇沢弘文 [2016] も参照されたい。

資本主義はどこへ向かうのか

番組制作とそれにもとづく書籍化への想いに深く共感し、あらためて敬意を表したい。「資本主義とはなにか」、そしてまた「資本主義はどこへ向かうのか」。この古くて新しい問題に回帰することがより強く問われる時代に今われわれは生き暮らしているのである。そしてこれは永遠の挑戦課題なのかもしれない。くわえてきわめてスリリングで刺激的だ。なぜならば、資本主義を問い直すことは経済学それ自体を問い直すことなのだから。

参考文献

- 伊藤誠 [2017] 『資本主義の限界とオルタナティブ』 岩波書店。
伊藤誠 [2018] 『入門 資本主義経済』 平凡社新書。
岩井克人 [2000] 『二十一世紀の資本主義論』 筑摩書房。
岩井克人 [2015] 『経済学の宇宙』 日本経済新聞出版社。
宇沢弘文 [2016] 『宇沢弘文 傑作論文全ファイル』 東洋経済新報社。
西部忠 [2011] 『資本主義はどこへ向かうのか—内部化する市場と自由投資主義』 NHK ブックス。
水野和夫 [2014] 『資本主義の終焉と歴史の危機』 集英社新書。
水野和夫 [2017] 『閉じてゆく帝国と逆説の21世紀経済』 集英社新書。
安田洋祐他 [2017] 『欲望の資本主義—ルールが変わる時』 東洋経済新報社。
D・コーエン [2017] 『経済成長という呪い—欲望と進歩の人類史』 東洋経済新報社。
M・サンデル [2012] 『それをお金で買いますか—市場主義の限界』 早川書房。
G・ドスタレール, B・マリス [2017] 『資本主義と死の欲動—フロイトとケインズ』 藤原書店。
I・ブレマー [2018] 『対立の世紀—グローバリズムの破綻』 日本経済新聞出版社。

